

佳作

私の祖父母

福井県 福井市春山小学校六年 萩原 榎乃

夏休みに入ってすぐのころ、私は母の実家に行き、祖母と古い衣服の整理をしました。五年前に亡くなった祖父がはいていたジーパンやポロシャツ、セーターなどが山ほど出てきました。その中の一枚のチョッキが目に留まりました。それを着た祖父が私とたくさん遊んでくれた事を思い出しました。祖父は音楽の先生をしていたので、ピアノをひいたりたくさんのお歌を歌ってくれて、とても楽しかったです。私は祖母に聞きました。

「このチョッキはどうするの？」

祖母は目を大きく開けて、そのチョッキをまじまじと見つめた後こう言いました。

「なつかしい。これはよく着ていたね。冬はいつもこれを着て、いっしょうけんめいピアノの練習をしていたよ。」

今度は目を細めて何度もうなずいていました。祖

母はとてもやさしいまなざしで、この時間をとても大切にしている様に見えました。

「決めた。これは捨てる。」

突然祖母が言ったのです。私は信じられません。いつも側にいた人の思い出のチョッキなのに捨てるなんて、私なら決心できないと思いました。理由を祖母に聞くと、

「何枚もそうやって残しておいてもきりがなし、いつか私が死んだらどうせ捨てる事になるだろうから。」

と、チョッキをじっと見つめながら言いました。

次々に整理をして、きれいな物や新品は寄付するダンボールにきちんとたたんで入れました。

その時祖母がつぶやきました。

「さみしいね。」

さっきまで前を向いていた祖母の姿はなく、しょんぼりとしてさびしそうに見えました。

「おじいちゃんの物を捨てても、おじいちゃんはおばあちゃんの側にずっといるよ。」

私がそう言うと、祖母はほっとした顔になった後、

「そうだよ。ありがとう。」

と言って満面の笑みをうかべてくれました。私は祖母の笑顔が大好きです。一緒にいた祖父もいつも笑

顔でした。私は二人の孫で本当に良かったと心の底から思いました。そして私達をずっと見守ってくれている祖父にありがとうという気持ちがいってきます。何だか胸の奥が温かくなって、この山の様な衣服を全部しっかりと整理しようと決意しました。祖母の古い洋服もたくさんあって、お気に入りだった白いレースのブラウスや赤いスカートにまつわる昔の話の聞いているうちに、すっかり時間がたっていて、手元には古い洋服は一枚もありませんでした。

帰る時に、げんかんの横に置いてある写真を見ると、祖父と祖母が笑い合いながら歩いている姿が写っていました。二人の笑顔が今ここに無かったとしても二人は強いきずなで結ばれている、私の自まんの祖父母です。